The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	批判主義批判としての『行動の構造』 : メルロ=ポンティ哲学における自然の問題へのアプローチ
Author(s)	中本, 泰任
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 1982, 16, p. 1-18
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/5411
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

批判主義批判としての『行動の構造』

――メルロ＝ポンティ哲学における自然の問題へのアプローチ――

中本泰任

序

X・ティリエットは『フッサールと自然の概念』の前書きに次のように言う――「メルロ＝ポンティは一九五七年の一学期間、その講義のテーマに自然の哲学を選んでいた……彼はとりわけ現代科学の自己批判や存在論的諸前提に注意を向けながら　ホワイトヘッドやリュイエのような科学の専門家達や、科学哲学者達の考え方に接近した……自然哲学というこの壮大な企ては、彼の執筆中の著作の企てと一致するものであった」[1]。ティリエットのこの言葉に端的に要約されているように、あるいはサルトルがメルロ＝ポンティ自身の言葉として伝えているように[2]、さらには『見えるものと見えないもの』およびそれに附された『研究ノート』の隨所に散見せられるように、いわゆるメルロ＝ポンティ後期におけるこうした科学哲学ないしは自然哲学への興味と接近、たとえその〈自然〉なるものが科学としての物理―化学のいう自然ではないとしても、いわば実存主義者達のなかにあっては稀れなこうした科学哲学と自然哲学への接近と傾斜。だがこのことは必ずしも〈実存〉をその中心概念とする初期の思想からの

離反、転向を意味するものではない。彼がその思索の営為に就くにあたって、知覚と身体を、科学的認識を含めたわれわれのもつあらゆる知の源泉として、世界と人間とを理解するための基盤として、すなわちその全哲学的探究の標的として狙い定めたその時から、この自然なるものはいかなる形であれ、いずれは逢着せざるをえない問題として、すでに最初期の作品のうちに見え隠れしていたはずである。処女作『行動の構造』（以下『行動』と略記）は、「われわれの目的は意識と自然の関係を理解することである」[3]という宣言でもって始められたのではなかったか。ところでこの意識―自然の関係とは、要するに次のような循環的関係なのである。すなわち、〈超越論的主観によって構成される客観的存在ないしは自然〉という現象学的テーゼは、メルロ＝ポンティ自身のテーゼでもあるが、しかるに現象学的還元を超越論的観念論への還帰だとする見解を拒む彼は、このテーゼの対極にあり、これと矛盾するもう一方のテーゼ、すなわち意識は客観的実在としての自然の因果論的結果ないしはその関数であるという自然主義的テーゼを、一方向のみに傾きがちな先の超越論的テーゼとのバランスを取るために重視するのである。しかしこのように相矛盾する両テーゼの比重を等しくすることは、『哲学者とその影』で引用されているフッサールの言葉通り、〈悪しき循環〉ではないかとおもわれるのであるが、この循環を積極的に引き受け、その循環的構造の直中で、この構造の諸相を飽くことなく露呈していったところにこそメルロ＝ポンティ哲学の本領があったと考えるべきであろう。[4]彼は言う、「超越的自然、すなわち自然主義のいう即自と、精神―その作用とそのノエマの内在性の間には疑いもなく何ものかがある。まさにこの両者の狭間にこそ前進が試みられるべきである」[5]と。ところでこのように理論的には矛盾、循環としか表象しえないこの構造の根底に存しているものこそ知覚経験であり、理論的循環と見えるものも、この次元では矛盾なく生きられている。理論的に純化捨象すれば、相反するテーゼへと移

行するような両契機を含むものとしての根源的知覚経験、この両契機を信憑的統一のもとに生きている経験、そうした経験を、この両テーゼの各々の知覚理論の片面的不充全さを批判しつつ、逆にこの両テーゼの根源をなすものとして露呈せしめ、こうした経験をそれ自体として了解しなければならないというのが彼の主張するところである。それゆえ周知のようにメルロ＝ポンティによって照準が合わせられるのは終始この生きられた知覚経験の層であり、また彼にとって現象学的還元ないしは反省も、いわゆる理念の衣によって通常覆い隠されている生世界に光をあてるという以外のことではない。

以上がその生涯を通して変ることなく一貫し続けた彼の哲学の基本的構想の概略である。未完に終った最後の著作『見えるものと見えないもの』は、知覚的信憑のこうした理論的定立化が不可能な二律背反的性格を再確認することでもって始められるし、われわれがここで問題とする処女作『行動』にあっても事情は全く同じである。そしてまた本論考の目的もこの事情、すなわち『行動』の言葉を借りて言えば、「一方では意識は身体の関数であり、それゆえある外的出来事に依存する《内的出来事》であるが、他方この外的出来事そのものも意識によってしか認識されないという矛盾ないしは二律背反」[6]が、ここでも結局は生きられた知覚経験の二面性に、その両義的構造に基づけられていることを確認することにある。とりわけここで焦点をあわせたいのは、その超越論的テーゼによる自然主義批判の側面ではなく、逆に自らの立場を超越論的としつつも、自然主義のテーゼをある形で容認することで批判主義的哲学と袂を分かとうとするその側面に対してである。というのも『行動』の目的の大部分は前者の側面を自然主義批判を通して確立することにあり、この後者に関しては、後の探究のためのプログラムといった程度にしか触れられておらず、この点を明確に見てとることは一つの作業を要することだとおもわれるし、また『行動』の

みを対象としてこの点を解明している研究もあまり見当らないとおもわれるからである。さらには既述したごとく、知覚と身体に照準したその瞬間から、〈自然〉は直ちに前面に立ちはだかる問題であったはずであるが、ことさら後期になっての自然哲学への接近であるとすれば、それは諸評者がまたメルロ＝ポンティ自身が指摘するごとく、初期の思索にあっては、この後者の側面、すなわち意識は身体も含めた自然の関数として扱いうるといういわば自然主義的現象に対する配慮、およびこの現象の彼自身の思索立場よりする根拠づけが必ずしも満足のゆくものではなかったと考えられるからであり、[7] しかもこの問題は以上述べてきたごとく、当然メルロ＝ポンティ哲学の根幹に関わる問題であるからである。しかし紙数の限られたここでは、『行動』のみを対象とし、本書ではこの問題に対してどのような解決が与えられているかを概略的に確認するにとどめざるをえない。

『行動』における自然主義批判

メルロ＝ポンティの科学に対する批判は、諸科学の研究成果である現象の記述的体系そのものに向けられるわけではない。彼の論難の鋒先が向けられるのは、物理、生物、心理学等の諸科学が意識的にせよ、そうでないにせよ前提にしている存在論、すなわち「互に外的で因果の諸関係によって結ばれた出来事」[8]の総体としての自体的自然という実在論一般に対してであり、それに対して彼は、〈全自然を意識の前で構成された客観的統一とする〉[9] 批判主義的立場に依拠しようとする。現在では物理学の認識理論が批判主義的見解を採用し、存在論上の論争から解放されているのに比して、生物学は未だ機械論か生気論かという実在論的発想の論議のうちにあり、心理学も己を自然科学と見なしている限りまた然りであるとして、『行動』はこの両科学の実在論的前提を取り払い、批判主義的、

認識論的観点から捉えようとするのである。しかし批判主義的とはいえ、彼が還帰しようとするのは既述したごとく普遍的認識主観に向ってではなく、知覚経験的意識に向ってである（そして後述するようにこの点にこそ『行動』の批判主義批判の論拠が存する）。科学の規定する即自的自然から知覚が結果するのではなく、逆に原初的経験たる知覚こそが科学の認識を基礎づけるというのが『行動』の、そしてまた『知覚の現象学』の根本的主張である。ところでわれわれがいわゆる自然的態度で生きている知覚世界には、物質的非生命的物体、および様々の生命的活動、さらには自己、他者という人間的諸活動が姿をみせており、そしてわれわれはその各々に対して、その各々に相応しい態度で接し反応しているが、結局このことは、われわれが知覚体験においてその各々を、互に他と異なれる独自なものとして了解していることを意味している。ところで上述のように科学的認識が知覚経験的認識の二次的表現であり、明確化であり、したがって科学上の諸概念も知覚なくしては有意義たりえないとすれば、そしてさらにこの知覚経験において生命体は非生命的物体とは異なれるものとして了解されているとすれば、科学的認識たる生物学も、知覚的了解たる生命とは何かを抜きにしては成立しえないことになろう。現象与件全体のうちから生命という意味範疇によって（また非生命的物質という意味範疇によって、）現象を区劃し、生物学（また物理学）に対してその対象指定を行うのは、知覚認識的生なのである。このように物理、生物、心理学等の諸領域的科学の成立する基盤には、現象与件全体を実践的了解意味によって、各々物理的（物質的）、生命的、人間的（精神的）秩序に区分する知覚が存するのであり、それゆえこの三秩序は、三実体としてではなく、知覚主観によって認識される三つの〈意味 signification、ないしは理念 idée〉だと定義されるのである――「われわれの外的経験とは多様な意味的諸全体の経験であると言うべきであろう、そのある意味的全体は物理的世界を構成し……他の意味的全

体は生物と呼ばれる」[10]。

以上のように批判主義的立場への還元は物理学のみならず、生物学、心理学に対してもなされることになるが、このように科学に先行し、科学を基礎づけるところの知覚的了解にあって、生命や精神は非生命的物質とは異なれる独自の意味として区劃されているとすれば、生命体や意識を非生命的物質意味ないしはその明確化である物理学—化学的規定に還元し、そこから〈説明する expliquer〉ことは不可能ということになる。かくしてメルロ＝ポンティの科学批判、すなわちその実在論批判（およびその帰結としての批判主義的見解への還帰）は、いわば物理学主義—物理還元主義批判へと接合する。一言で言えば彼の自然主義批判とは、知覚意識も含めた諸々の形態の意識を、物理—化学的に規定された即自的自然——自然主義的発想の解剖学、生理学によれば身体もこの一部である。このような身体は〈客観的身体 corps objectif〉と呼ばれる——の因果論的結果ないしは関数として説明しようとする理論一般への批判である。

ゲシュタルトとしての物質・生命・精神

ところで知覚はいかなる現象のいかなる表徴によって当該現象を生命すなわち魂 âme ある実存と認知するのか（メルロ＝ポンティにとっては動物も実存する）。言うまでもなくそれは無機物とは異なった振舞いをする、すなわち〈行動する〉身体によって、あるいは身体の行動によってである。むしろ行動即生きた身体即生命と言うべきであろう。実存する私は私の眼前に展開される行動のうちにもう一つの実存＝他者ないしは生物を認めるのである。この生きた身体が〈現象的身体 corps phénoménal〉と呼ばれるが、このように生命ないし精神は、非生命的物質

と同じく眼に見える現象的身体＝行動においてこの私の知覚世界に現出するのであって、身体＝行動が純粋な物でも心でもないと言われる所以である（附言すれば他者や動物の知覚世界もこのように知覚される行動を通して外部から捉えられる以上――たとえば動物に有色図形を提示し、それに対する反応行動を観察する――一種の行動として扱われる。つまり本書は何よりも〈行動〉の構造なのである。このようにメルロ＝ポンティが内省と外的観察との間に本質的相違はないとして、意識を自己のみに接近可能な私秘的領域とは見なさない点に注意すべきであろう）。かくして本書では行動という特異な現象の記述解明にその大部分が当てられることになるのだが、それは先述した自然主義的還元主義への批判が、とりわけ古典的反射学説の行動理論批判を通して展開される。行動とは物理－化学的刺激に対する反射の総和ではなく、それら刺激を、刺激自体が持ってはいないような意味、すなわち生命体にとっての〈環境 milieu〉意味に変容し、その意味に対する反応なのであり、行動とはむしろこの環境とそれに対する反応という弁証法的関係の全体なのである。そしてこれが原子論的解剖学の事象には尽しえず、物理的秩序にはその等価物を見い出しえない新たな意味的全体たる生命的秩序なのである。『行動』は生命のこのような行動をさらに〈癒合的 syncrétique〉、〈可換的 amovible〉、〈象徴的 symbolique〉という三つの形態に分類し、動物は自己の環境世界に癒着した行動しかなしえないのに比し、象徴的形態の行動をなしうる人間は、自らの直接的環境を超出しうるものであり、これを人間という行動の特質として捉える（この点に関しては後に問題とする）。

以上のようにメルロ＝ポンティは知覚的認識を根源的なものとしつつ、知覚の了解する行動＝生命的意味を独自なものと見なすことで還元主義を排し、生命と無機的物体、精神と物質の間にいわば断絶を導き入れるのであるが、しかしそれは既述のごとく機械論的実体に生気論的実体を対置することではなく、断絶と見えるものも実はその主

張の一半でしかない。今しがた見たように私が知覚において実存する生命（他者や動物）を了解するのは、物質的物体と同じく眼に見える身体の行動においてであった、そして、行動とは〔現象的身体↔その環境〕という弁証法的全体なのであった。それゆえ生命を了解するということは同時にその環境としての自然も了解していることを意味する。[11] もっともこの自然は全き意味での自然そのものではない（私の知覚野はまずなによりも私自身の人間的生の実践的環境野として開かれる）。しかし先に触れておいたように、象徴的形態たる高等な行動を行いうるわれわれ、人間的弁証法に達したわれわれは、唯に自己の現実的環境というパースペクティブに囚われることなく、無限の可能な観点へと開かれており、「現実的環境の向う側に、各々の我れが多くの局相の下に見ることのできる諸々の物の世界を認知している」。[12] つまり人間的環境自然を透かして、そこにはニュートラルな自然、自然事物そのものが現出していることになる。換言すれば、現象的身体―環境自然という系はまた同時にある観点からは客観的身体―物的自然という系としても現象しうるのであり、またその逆も然りである。この両義性、この観点可換性、これこそ『行動』が〈ゲシュタルト〉なる概念でもって言わんとしていることであろう。われわれは物的自然現象のある領域を、物的自然でありつつ、かつそれを超出する生命現象として了解している。この両者の関係は、それを部分的構成要因とし、それなくしては存在しないが、また同時にそれを超出するゲシュタルト的意味全体という関係なのである。生命現象は解剖学―物理・化学的系には還元しえない独自の意味を持つとしても、逆に生体の諸機能はそれらに依存し、解剖学の言う「神経実質のある部分はしかじかの刺激の受容やしかじかの運動には不可欠なのである」。[13] したがって、「現象的身体の独自性をそのまま記述する記述的生物学と因果的説明との間には互いに奉仕しあう関係がある」。[14] と言われる。このようにして生命的秩序は物理的秩序をその部分とするゲシュタルト的全体への

〈統合化 intégration〉として、さらに人間的秩序はそのさらなる統合化として解されることになり、生命、精神に対する自然主義の因果論的説明は排されることになるが、逆にこれらの統合が解体する病的状態（実験室での人工的環境等）の場合には、いわば物理―化学的身体理論が妥当する状態を呈するとされるのである。物的自然と生命ないしは精神との間のこの断絶と連続。この両者は互に異質なものとして各々絶対化されるとともにまた相対化もされるわけであり、ここにおいてこそ心身の区別と統一とが同時に把握しうるものとなると『行動』は言う。このようにしてメルロ＝ポンティは意識を自然的事象に解消しようとする自然主義と、他方「物理的世界も有機体も純粋認識主観の対象、すなわち純粋意味とすることによって、心身関係も、意識と物理―有機的諸条件との関係も不可能にしてしまう」[15]批判主義、その両者に対して距離をとろうとするのである。

批判主義批判の論理――根源的経験としての知覚野への還帰

しかしそうはいうものの、ゲシュタルト的統合度の相違として区別された物質―生命―精神という系は、要するにそれを認識する主観（結局は根源的了解を行うところの知覚主観）である私の前の対象である。物理―化学的規定をもつ自然とはわれわれの認識の所産であるし、生命という有機体の統一も理念による現象把握である。つまりゲシュタルトとは物理的実在ではなく、それを認識する知覚にとってのみ存在するというのが『行動』の主張である。換言すれば、意識（この場合他者のそれ）を、生命および物理的秩序に基づきつつかつ超出するものとして行動のうちに捉えるところのこの私自身は、これまでのところこの系には属さない〈外的観察者 spectateur étranger〉であり、それゆえ序及びそれに続く節で見たごとく、メルロ＝ポンティは超越論的立場に依拠していることになる。

しかしR・C・クワントも指摘するように、[16] このゲシュタルト的統合化という系を認識する主観そのものもこの系に属するものであり、したがって身体や物理的条件を蒙るものであることを示さなければ、『行動』は自らを批判主義と完全には差異化しえず、その批判主義批判は完遂されまい。『行動』が述べるごとく、「普遍的場としての意識と従属する諸弁証法（生命的、物理的秩序）に根ざした意識との関係」[17] が問われねばならないのである。しかしここでもメルロ＝ポンティが赴くのは、再びそして結局は知覚経験的生へ、その両義的構造へなのであり、それ以外ではありえないのである。彼は普遍的純粋意味を知解intellectionするところの純粋意識と、〈生の体験流〉としての知覚意識とを区別することによってこの問題を解こうとする、と言うよりむしろ原初的認識としての知覚的了解のうちに序で述べた矛盾的循環構造をそのまま認めようとするのである。だがそうだとすれば、これまで見てきた知覚、すなわち行動のうちに自然と意識との関係をゲシュタルトという両義的関係として了解するこの私の知覚の構造のうちにすでに批判主義批判の論拠は隠されているはずである。以下この点を検討する。

既述のごとく私の知覚には物質―生命―精神（実存する他者）という構造が現出しているが、しかしこれだけに尽きるものではない。そもそも私が、知覚される生きた身体＝行動のうちに実存する動物や他者を認めるというのも、私自身が行動する実存であるからに他なるまい。私の知覚野は他の実存の環境としてよりも、むしろ私自身の生命的―人間的実践の環境世界として開かれているはずである。つまり私が自らの実践的指向を接合させるのも、他の実存が姿を見せているこの私の知覚世界のうち以外ではありえず、しかもそれは他の実存がそうするのと同じく私の現象的身体＝行動を通してであり、そしてこの自己の身体そのものもそこに現象しているのである。かくして私の知覚野とは、私および他の実存の指向、行動の交錯する人間劇のいわば舞台である。したがって前節で問題

とした物的自然なるもの、すなわち自己の現実的環境というパースペクティブに閉塞されない人間的弁証法に達したわれわれに現われている物そのものの世界とは、要するに私の指向も他者の指向も共に担いうる中性的なものとして、自―他のあらゆる観点から眺めうる可能性をもつものとして、私の知覚野に現出するものと言えよう。以上のように私の知覚野とは、〔他者＝現象的身体＝行動〕↕〔その環境的自然〕↕〔物的自然＝物そのもの〕↕〔私の環境的自然〕↕〔私の現象的身体＝行動〕という系をもつものであり、このように我れ、身体、物、他の行動（知覚）主体をその契機とする〈生きられる弁証法〉の現象的全体である。このように自然的態度に生きている私は、私の知覚野の一領域現象たる身体とその環境との弁証法的関係＝行動のうちに他者を認知しているならば、そしてまた私自身もその同じ世界を自己の生の環境となし、それと自己の身体との関係＝行動においてあるならば、この私は世界を超越し、世界を表象的対象として所有する純粋意識ではなく、他の実存と並ぶこの世界内の一実存として、そこに共存するcoexisterものとして了解されていることになるが、このことは結局、物理―生命的下級秩序を超えつつもまたそれらに基づくものとして（すなわち物でも心でもない行動を通して）他者実存を捉えるところの私自身も、その他者と異なれる存在様式をもつものではないという了解を意味する。換言すれば、他者の意識を存在の一領域として認知する主観としての私自身をも対象化して一領域存在と見なすことである、あるいは逆に言っても同じことだが、知覚主観たる私は、自らをその内部にあるものとして世界を了解する主観であるということである。この超越にして内在、内在にして超越、これこそ知覚の両義性と言われるものであり、以上のごとく『行動』第四章は、根源的了解としての知覚の両義的構造に立脚することで自らを批判主義と分ち、自然主義的実在論にもある意味で許容しうる余地を残そうとするのである。すなわち前々節で見たように科学の自然主義的前提は批判さ

れ、誤謬だとされるのではあるが、その誤謬は正当な現象に根拠をもつ誤謬であり、その正当な現象とは、「部分的射映はその射映の表現する全体的意味に関わっている」[18]という知覚経験に固有の両義的構造だとされるのである。ところでここに言われている両義性は、先述した〈我れ—身体—物—他の行動主体〉を契機とする知覚野の統一的構造と異なれるものではない。すなわち自己の身体を通しての知覚とは個人的出来事であり、現実的にはある偶然的射映に限られているが（『行動』は当然この点にも知覚の実在論的様相を認める）、そのパースペクティブの分節化において部分的射映を越え、潜在的には他の可能な観点に——いわば他者のそれ。既述したごとく他者の知覚世界も行動を通してある意味で知覚されるものであった——立ちつつ、それら諸観点の交錯の上に、現実的一局面を超越した物そのものという〈間個人的意味 signification interindividuelle〉を指向するものである（したがってこの物そのものとは、個々人の環境を超出した物的自然という意味でもある）[19]。そして私自身の身体もこのような両義的構造をもつ私の知覚野に現われている以上、この物の現出様相と本質的に異なれるものではなく、それは現実的—潜在的諸観点のつき合せのうえに対象化されているはずである。そしてまさに「自己の身体を諸対象間の一対象として扱いうる」[20]ということこそ人間の〈象徴的行動〉を特徴づけるものなのである。もっとも知覚する当の主体そのもの、観点そのものとしての身体は決して私には現実的所与とはならないのであるが——「外的知覚が存在すること、私の身体が存在するということ、またこの身体のなかに私には知覚しえない現象が存在することは厳密に同義である」[21]。したがって私に知覚される自己の身体現象のうちには、私が他者すなわちその現象的身体＝行動に認めたのと同じ構造、物的—有機的秩序を越えつつまたそれに条件づけられるという両義的構造が潜在的に含まれていることになろう。この私にとって潜在的現象は、他者にとっては逆に現実的所与であるはずである。そ

してこの両者が一致しうるということ、この主観―対象の間の相互可換性、それは結局、意識と自然の関係が知覚的了解意味なくしては成立しないゲシュタルトという両義的関係であり、しかもその知覚的意味は、自他の現実的、潜在的諸観点の交錯の上に指向されるものであるという点に存するのである。すなわち意識と自然との関係を両義的関係として認識する意識そのものもこの関係のうちにあり、それゆえこの意味において意識の自然主義的説明が妥当しうるということ、換言すれば観察者たる他者が、私の身体のうちに、私には現には知覚されえない網膜、神経、大脳現象等の解剖、生理学的諸現象を認め、それらを私の意識野の現実的諸現象と関係づけることができるということは、『行動』においては結局次のようなことを意味する。自然主義批判の節で見ておいたように、生物学が知覚了解たる生命意味なくしては成立しえず、それをその理論体系から排除しえないのと同じく、解剖・生理学もこの私の生きた身体、その感覚・知覚機能の解明を目的とする限り、私の現なる知覚光景、その具体的記述特性を前提とせざるをえない（還元的説明の不可能性）。現代の生理学がその神経活動理論のうちに、知覚野に独自の現象たる〈横の機能〉なり、ゲシュタルトなる概念を導入せざるをえなかったのもこうした事情によると『行動』は言う。したがって観察者として私の身体のうちに種々の解剖―生理学的現象を認める他者も、それらの現象を理解するためには、「私の知覚内容と一致するような意味をその現象に認めなくてはならない」[22]ことになろう。しかるに各々の知覚とは行動する身体を通して互に透視可能なものであり、それゆえ自他の現実的、潜在的諸パースペクティブの交錯の上に目指される意味であった。以下『行動』からそのまま引用しておく――「観察者と私自身が互にわれわれの身体に結びつけられているという事実は、結局次のことに帰着する、すなわち私に現実性という様相の下に具体的パースペクティブで与えられうるものは、観察者には潜在性という様相で意味としてしか与えられず、また

その逆も然りである。要するに私の精神――物理的存在全体（つまり、私自身についての私の経験、私についての他者の経験、また私自身についての認識に私や他者が適用する科学的認識）は、そのうちのいずれかが知覚されて現実性となる時、他のものは潜在的にしか目指されないという諸意味の交錯なのである」[23]。

結び

以上の検討からわれわれがここで確認しておきたいのは、『行動』序論で問題提起された意識と自然との関係とは、結局知覚される行動という根源的了解に基づいて認識されねばならない、そして認識される限りでの両義的関係――部分的構成因とゲシュタルト的全体との関係であるという点である。すなわち『行動』の目的とその作業の大半は以上の点を明らかにすることで、自然主義、批判主義の双方から自らを差異化しようとすることにあるが、自然主義批判が既述のごとく、いわば物理還元主義批判であり、その批判の論拠が、この両者の関係の両義化＝一方的還元の不可能性にあるとすれば、この批判が有効でありうるためにも、ここで問題とされている〈自然〉とは還元主義の言う自然、すなわち最終的には物理―化学的に規定されうる因果論的自然でなければなるまい（序論はそう規定している）。したがってまた逆に批判主義からの距りを強調する目的で、ゲシュタルトとは観念 idée ではなく、〈自然と観念との統一である〉という言い方が往々なされるが、その場合の自然も同様に解すべきであろう。そしてこうした自然とは、メルロ＝ポンティにあっては物理、化学という学的認識の所産である（もちろん知覚了解的自然に基づいた）。それゆえ結局この意識――自然関係とは、このように知覚了解に基づいて認識される限りでの自然と、また「身体というパースペクティブ（行動）を通して認識される意識」[24]との両義的関係と解される。つ

まり『行動』はまずなによりも知覚主観によって認識される行動の構造であり、本書は解剖学、生物学等の行動理論の自然主義的前提が自己崩壊する過程を通して、こうした超越論的観点の必然性を主張しようとするのである。しかし他方、自らを「批判主義とは同音異義の関係にある」[25]とする『行動』は、この意識―自然関係を認識する主観もまたこの関係のうちにある可能性を示さなければならないが、検討したごとくこの可能性もまた知覚経験に固有の了解構造に求められることになる。すなわち人間的生の実践的了解たる知覚とは、行動のうちに上述の意識―自然関係を認めつつ、また自らもその行動においてこの関係のうちにあると了解する両義的構造を有するものである。つまりこの了解とは、認識主観としての意識そのものも、物理―有機的に条件づけられうる側面をもち、その自然主義的説明がある点で妥当するものとして認識しうるという可能性への了解と言えよう。したがって『行動』では、われわれの意識をある意味で条件づけるところの身体（その自然主義的側面）ないしは自然も、そのゆえに超越的存在ではなく、まさにそのようなものとして認識可能な存在であり、その可能性は根源的了解たる知覚経験に基づく存在であると解される。以上が『行動』における自然（身体のある側面も含んだ）の基本的な地位規定だとおもわれる。それゆえたとえメルロ＝ポンティが批判主義に抗していかに両義性を強調し、〈意味〉に代えるに〈ゲシュタルト、ないしは構造〉という用語法でもってしようとも、「彼が解きほぐしがたい根源的混淆、すなわち両義性から逃れようとすると、彼は伝統的な超越論主義に復帰することになる」[26]という指摘も出てくることになるが、それはある意味でメルロ＝ポンティ自身が意識的に選んだ態度でもある。

しかし序節で触れたように、これで身体―自然（そしてまた知覚）のもつ諸問題が解決されたわけではなく、たとえば「客観的存在を構成する意識をもある意味で包み込む客観的存在」[27]という表現からも窺えるように、彼の後

の思索にあっては、逆にいわば反超越論的テーゼの側面がその両義的バランスの上でより比重を占めるようになり、自然の問題の検討の重要性が語られるようになる。そしてこうしたバランスの移行の契機となった問題点の多くは、この『行動』のうちにも存すると考えられるのであり、またそれを指摘することがわれわれの最終的な目的でもあったのだが、紙幅の尽きた今は、『行動』の基本的立場と、そこにおける身体—自然の位置づけを以上のように確認するにとどめる。

注

（1）Xavier TILLIETTE, “Husserl et la notion de Nature (notes prises au cours de Maurice Merleau-Ponty)”, *Revue de Métaphysique et de Morale*, 1965, n°3, pp. 257～258.

（2）cf. Jean-Paul SARTRE, “Merleau-Ponty” dans *Situations IV*, (Gallimard), 1964, pp. 270～271.

（3）Maurice MERLEAU-PONTY, *La structure du comportement*, (P.U.F.), 1942, p. 1. (以下本書はS.C. と略記)。

（4）こうした循環性は『見えるものと見えないもの』研究ノートでも確認されている。cf, Maurice MERLEAU-PONTY, *Le visible et l' invisible*, (Gallimard), 1964, pp. 220～221.

（5）Maurice MERLEAU-PONTY, “Le philosophe et son ombre” dans *Signes*, (Gallimard), 1960, p. 209.

（6）S. C., p. 232.

（7）一例をあげれば、『見えるものと見えないもの』の研究ノートは、『知覚の現象学』の立場では、脳損傷のごとき客観的秩序の事実が意識と世界との関係の障害を引き起すといったことは理解しえないと反省している。そしてこうした難点を解消するためには、意識の所謂客観的条件づけとは何かを問う必要があるとする。

（8）S. C., p. 1.

（9）S. C., p. 2.

（10）S. C., pp. 172～173.

(11) 「他人についての経験の中に含まれているものを展開する完全な心理学があるなら、それはそこに自然や世界への関係を見い出すはずである」。S. C., p. 179. 脚注参照。
(12) S. C., p. 190.
(13) S. C., p. 223.
(14) S. C., p. 170.
(15) S. C., p. 220.
(16) レミ・C・クワント『メルロ＝ポンティの現象学的哲学』滝浦静雄、竹本貞之、箱石匡行訳、（国文社）、1976, pp. 43～44.
(17) S. C., p. 199.
(18) S. C., p. 223.
(19) 知覚がこのようにそのパースペクティブを通じて客観的意味へと開かれていることが、他者および間主観性を可能にするのか、あるいは逆に前者は知覚がまず行動を通して他者へと開かれていることに基づくのか、この点に関しては議論の存するところであるが、ここでは『行動』に従って、知覚とは部分的射映の表現する全体的意味であり、また知覚される自他の諸行動も一なる世界を目指すものとして了解されていることを確認しておけばよい。ただし知覚される行動＝他者実存とはゲシュタルト的意味であり、また知覚はそのパースペクティブのゲシュタルト的分節化によって客観性を指向するものである。したがってこの両者の間の何らかの関係が考えられる。
(20) S. C., p. 128.
(21) S. C., p. 234.
(22) S. C., p. 234.
(23) S. C., p. 234.
(24) S. C., p. 233.
(25) S. C., pp. 222～223.
(26) X. Tilliette によって引用されている G. Derossi の指摘による。cf. Xavier TILLIETTE, *Merleau–Ponty ou la me-*

sure de l'homme, (Éditions Seghers), 1970, pp. 41～43.

(27) Maurice MERLEAU-PONTY, "Le concept de nature" dans *Résumés de cours* (*Collège de France 1952-1960*), (Gallimard), 1968, p. 112.

(文学部助手)